

あとがき

生誕100年司馬遼太郎さんと今東光  
～当時を知る山本明代さんを訪ねて～

令和5(2023)年夏、国民的作家・司馬遼太郎さんの生誕100年を迎えました。その司馬さんが八尾で東光と交流していたことを、ご存じのかたは少ないのではないのでしょうか。

そこで、月刊華道誌「未生」の編集長を30余年つとめるなど、戦後大阪の文化史をよくご存じの山本明代さん(94歳・豊中市在住)を訪ね、70年前の思い出の一部を語っていただきました。

～昭和29(1954)年5月に、國田彌之輔さんを編集長に、今先生を顧問に「未生」が創刊され、翌6月には産経新聞の文化部美術記者だった司馬遼太郎さんが、当時は本名「福田定一」の名で、華道界についての所感等を、また今先生は「夜鬼庵隨筆」を、おふたりが毎月交代のような形でエッセイ等を寄稿してくださいました。司馬さんは昭和31(1956)年には未生に「花妖譚」として、自筆の挿絵入りで短編を発表してくださるようになり、それらは後年纏められて同タイトルで司馬遼太郎名で刊行され(文春文庫)、令和元(2019)年の第2刷には、私もその当時のことを少し書かせていただいています。

その頃、今先生は司馬さんら主宰の同人雑誌「近代説話」の創刊にも協力しておられましたし、大阪の文化の色々なところで、皆が重層的に関わっていたという感じです。



山本さん(中央)きよ夫人(右) 昭和29年頃 天台院にて

天台院には司馬さん達もよく来られ、いつもワイワイガヤガヤ、楽しいサロンになっていました。私自身も今先生が主宰された「大阪文学会」の日曜日の集まりに入り、「未生」の関係もあって、よく天台院をお訪ねし、今先生ご夫妻と一緒に旅行に行ったこともありました。

今先生は八尾に来られて、まさに「水を得た魚」といった感じで意気軒昂でしたし、自分よりはるかに年下の相手にも心遣いをされる紳士でありながら、とにかく抜群に話が面白かったです。これは司馬さんもたびたび書いておられましたね～

うかがった貴重なお話は、とてもこの紙面には収まりきれないものでした。

こうしたエピソードは、また機会をあらためてご紹介したいと思います。(岡本)



KON TŌKŌ MUSEUM

今東光資料館だより  
令和6(2024)年 No.2

冬

編集・発行: 今東光資料館 tel.072-943-3810  
〒581-0003 大阪府八尾市本町2丁目2番8号  
八尾図書館3階



## Series 東光が描いた河内・八尾 ～年始～

人情味豊かに描かれた東光の作品には、春夏秋冬の様々な風物が補足的に——ときに、小説の「筋」から離れていくのではと思われるほど詳細に——描かれています。

…「それにな。河内の百姓等は礼参りに行たもんや」

「あれ何日やったいな」

「正月二日やがな。その年の恵宝の明きの方角に向いたもんや」

「あの文句かてきまってきたな。何んやったいな」

「あれか。あれはな。『お目出度う。今年も田は三石、綿は三百五十取り』と唱えて、三鍬ずつ畑を耕して、お神酒をまいて帰って来たもんや」

「せやったなあ。わて等も島田鬻結うて」

「髪を壊すのが愛しゅうて、よう寝なんだもんや」

「箱枕やのんになあ」

「今ごろの娘はあの枕によく寝よれへん。頭が痛い、頸の骨が折れそうやのと、やかましいこっちゃ」…

(「川蟹(小説河内風土記巻之二)」より)



八尾天満宮八日戎  
昭和35(1960)年1月8日  
写真: 田中幸太郎

小説の流れのなかで唐突に登場する余談をつかって、読者を河内の舞台に引き込んでいきます。こうした河内・八尾の郷土講義のような一節は、東光の「河内もの」と呼ばれる作品群のなかによくみられますが、それは河内のことを多く書き留めたかった東光にとってみれば、自然なことだったのかも知れません。

司馬遼太郎さんが、東光作品の河内弁をこう評しています。

「私は河内弁についてはナマで聞いて生活しているのですから、わり合い知っているつもりですけど、今さんの一連の河内風土記ものの中に出てくる河内弁というのは、活字で定着した、唯一のものではないにしても、最も正確なものですね。」

(「春宵対談!今東光/司馬遼太郎 不良少年から〈国盗り物語〉まで(小説現代 昭和48年4月号)」より)

こうした「生きた河内弁」「河内人の息遣い」を感じることができる今東光作品。

機会がありましたら、ぜひ手に取っていただければ幸いです。(岡本)

# 青春と東光

大正4(1915)年、東光(17歳)は、その年二度の退学処分を受けて年末に上京。画家を目指し、関根正二や東郷青児と知り合うなかで、独学で次第に文学の道を志します。やがて、川端康成と出会い帝大の“モグリ大学生”から菊池寛、芥川龍之介等と『文藝春秋』創刊に参画していきます。

令和5(2023)年11月8日八尾市プリズムホールの文学座公演「逃げろ！芥川」に菊池寛、芥川龍之介が登場します。

八尾ゆかりの直木賞作家、今東光を識ってもらえる千載一遇の機会を得て『百年前、文藝春秋創刊の頃』と題し大正・昭和期、文学者として切磋琢磨した菊池寛・今東光・芥川龍之介・川端康成等、知る人ぞ知る関係性、エピソードを写真パネルで紹介することができました。(11月1日~11月11日/プリズムホール1階オープンコーナー)

100年前、大正12(1923)年といえは1月に『文藝春秋』が創刊、9月1日には関東大震災が起こりました。



さて舞台は大正8(1919)年5月4日。親友の芥川龍之介と菊池寛は「スペイン風邪」の感染を恐れ、取材名目で東京を逃れ長崎旅行へ。列車の途中で芥川ゆめまぼろしの作品の登場人物や初恋の人、妻や愛人、「児童」が時空を超え「夢幻」に現れます。

上演当日は市外からも大勢の文学座・演劇ファンで盛況を呈し、客席はテレビや映画では味わえないナマの俳優の波動を感じながら演劇の素晴らしさを堪能することができました。

今回この様なコラボ展示ができたことに、関係者の皆さまへ深く感謝申し上げます。(木村)



創刊の言葉  
俳諧の力  
新劇のこ  
荷風の言  
放言の憂  
林金花

芥川龍之介  
菊池寛  
中戸川吉二  
今東光  
川端康成

※文藝春秋 創刊号 表紙部分拡大

# 東光余聞 No.2-文:伊東 健

## 『ブギウギ余聞』

現在NHKで朝の連続ドラマ「ブギウギ」が放送されています。

意外と知られていませんが、今東光原作作品は宝塚や松竹でかなり上演されていました。



大阪松竹少女歌劇団(OSK)の「桜咲く国」を作曲した松本四郎氏とは古い友人であり、東光は彼をモデルにして「裸の恋人」という小説を産経新聞に連載し、中央公論社から上下巻の長編として刊行しています。小説中では松田四郎として登場しますが、今回のドラマで、梅丸少女歌劇団(USK)の林部長の補助線上に、今東光が透けて見えると思えば、深みが増してきませんか？まさに余聞なことです。

ところで、この「裸の恋人」の連載を担当していたのが、当時産経新聞に勤めていた福田定一、後年の司馬遼太郎氏でした。函館のトラピストを小説中に登場させるために、東光と司馬氏の二人が取材旅行に一緒に出かけている様子を、後に司馬氏が街道をゆくシリーズの「北海道の諸道」に記しています。

特に連載小説の挿絵を担当していた画家の佐藤泰治氏がこの取材旅行中に逝去したことは、東光、司馬氏の双方が時を隔てて、その訃報に接したことを記しています。



「挿絵を担当してくれた佐藤泰治君は、僕の信頼し、敬愛する画家だった。ところが不幸にして四十二歳の若さで夭折した。泰治君は僕の挿絵を五百四十六回まで描いて中道にして終わったのである」

(今東光著「裸の恋人 下あとがき」(昭和35年10月30日発行)より)  
「今さんとこの町にきたとき、挿絵を担当する佐藤泰治画伯が前日に東京からきていて、空港で待ちあわせる約束になっていた。私どもが待合室に入ると、いそいで立ちあがって顔中をさわだらけにして笑った顔や、ベージュのレイン・コートのポケットのふくらみぐあい、塗料の剥げた写真機など、いまでもこまかく憶い出すことができる。」

まだ四十になつていなかったが、この年から数年後に突如亡くなった。脳出血だった。

(司馬遼太郎著「街道をゆく」5 北海道の諸道朝日新聞社昭和60年7月20日朝日新聞社発行より)

佐藤泰治氏は、東光が天台院へ引越してきて、初めて東京新聞紙上で連載小説を任された「山椒魚」でもコンビを組んでいました。「山椒魚」は河内文化を関東地方に紹介した、東光にとっては最初の長編小説であり、あの朝吉が登場した記念すべき作品にもなったのでした。